意味研究の方向と問題点

室　井　禎　之

言語研究の中でも，意味研究はその対象の性格が特異である。すなわち，音韻，形態，統語といった現象が，かたちに現れたものであるのに対して，意味はそういった直接知覚できる手がかりを持たない内的なプロセスである。それだけに，どのような方法を使えばどのようなことが明らかになるのか，という分析結果と意味作用の関係に対する鋭敏な方法意識が強く要求される。

Saussure は言語の本質的特徴として 4 つの側面を挙げた。すなわち，恣意性，社会性，体系性，通時相と共時相の区別である。20 世紀の言語研究はこのうちとりわけ体系の追求につとめてきた。意味論もその例外ではなく，Saussure の音と意味の 1 対 1 対応モデルに従って，意味システムの構築を目指してきた。しかし，その間，認知意味論の登場によってこのモデルの問題性が明らかとなり，かつてのエレガントなシステムの追求から，現在はより柔軟なシステムを理論化する試みへと重点が移行している。意味システムはさまざまな両面性をかかえており，意味研究はそれらを継子扱いせず，理論の中に組み込まなければならない。1) 安定性と可変性：コミュニケーションを可能にするため意味は高度に安定していなければならないが，一方でさまざまな変異が見られ，ad hoc な意味でことばを使うことも可能である。2) 社会性と個人性：言語は共同体の所産であるが，実際には不均質な個人によって学ばれ，使用されている。意味も個人差がありながら，現実にはそのまま通用している。3) システムとその応用：意味のシステムは，その使用のために高度の自由と柔軟性を保証するものでなければならない。また，使用がシステムそのものを変えてしまうこともある。4) 普遍性と個別性：色彩語彙の研究に見られるように，認知システムに由来すると思われる普遍的な現象がある一方，言語に特有なメカニズムを想定することなしには説明できないような意味の用法も存在する。これらの両面性は素性意味論のような集合論的モデルでは説明できず，新たなアプローチが必要である。意味を実体化せず，後追い可能なプロセスとして記述する方向を追求することが，多様な変異のなかでの相互理解という意味作用のあり方の解明につながると思われる。そう考えると，意味のシステムは，つねにその度ごとに作られる，あるいは更新される部分システムであると見ることができるかもしれない。そして，その部分システムを形成し，表現と理解を可能にするメカニズムこそ意味作用の根幹であるといえないだろうか。多くの，特に伝統的な意味論は，意味も全体として一つのシステムをなしていると a priori に考えていたが，それにも疑問が呈される。